

弥生時代の高坏（二）
—日本列島西半部における土製供膳具の様相—

川 上 洋 一

目次

I . はじめに	3
II . 大陸の文化との関係からみた弥生土器の高坏の 既往研究における位置付け	3
III . 本稿の分析の対象と目的	3
IV . 分析・検討	6
V . まとめ	12

論文要旨

2021年に発表した論文において、朝鮮半島の水石里式土器の豆形土器の影響を受けて、弥生土器では土製の高坏が中期中葉以降に列島西半部から次第に盛行してゆくと考えた。しかし、前稿では列島側で北部九州地域、そして中期の様相のみを取り上げて分析・検討するにとどまったため、本稿では北部九州地域、中部瀬戸内地域、近畿地域（大和）の中期～後期の高坏を対象とした。さらに、高坏とともに同じ供膳具と想定される鉢を取り上げ、高坏の坏部と鉢のサイズを比較してその展開を分析し、その背景を検討した。その結果、大型鉢を除いて考えると、中期には高坏と鉢の口径は同様の分布域で、その機能は重複した部分もあったと考えられるが、後期中葉になると高坏の口径の方が大きくなり、鉢と分化した状況を想定できることが明らかになった。ただし、中部瀬戸内地域では他地域と異なり、後期中葉以降に高坏の低脚化が進み、坏部の口径と坏部高が縮小して小型化し、鉢との差異が小さくなることが想定され、地域によって特色ある展開であったことが留意される。

川上 洋一（かわかみ よういち）

奈良県立橿原考古学研究所 副所長兼附属博物館館長

I. はじめに

弥生時代の土器の基本器種は壺、甕、鉢、高坏とされ、これらの器種に、時期や地域によって器台や支脚などが加わる。また、壺、甕、鉢、高坏のうち、高坏は前期にはその数が非常に少なく、木製の高杯がむしろ主であったが（小林・末永ほか 1943、坪井 1959、佐原 1976）、前期末～中期初頭にかけて、朝鮮半島に系譜がある水石里式土器の各器種がセットで北部九州地域を中心に出土する状況の中で、水石里式土器の豆形土器（高坏）を製作・使用する習慣の影響を受けて、列島西半部、特に北部九州地域において、土製の高坏の使用が中期中葉以降に列島西半部を中心に盛んになるという見解を、前稿（川上 2021）で示した。

ただし、前稿の検討は対象地域を、水石里式土器が多く出土する北部九州地域にほぼ限ったため、列島の他地域での展開は検討できなかった。そのため、他地域でも中期以降に土製の高坏の使用が次第に盛んになるその様相を本稿において検討する。

II. 大陸の文化との関係からみた弥生土器の高坏の既往研究における位置付け

大陸にその系譜がある弥生時代の高坏について、東アジア的な視点で考える際には、都出比呂志氏の研究（都出 1984）と長友朋子氏の研究（長友 2005）が重要であると前稿でも述べたところである。さらに最近、韓国のパク・ヤンジン氏が東北アジア地域の豆形土器の出現と展開、消滅について、中国における豆形土器の展開から説き起こして論じた研究が発表された（パク 2022）。パク氏の研究では日本列島の弥生時代に盛行した高坏には言及されていないが、筆者が前稿で述べたとおり、弥生土器の土製の高坏を多く使用するようになるのは、朝鮮半島における豆形土器に系譜があること（川上 2021）が、その淵源を辿れば東アジア的な動向の中の東端の現象と捉えうることがわかる。パク氏は豆形土器の消滅は豆形の木器や漆器の存在と関係すると述べる¹⁾。日本列島でも前期には木製の高杯の方が多く、中期以降に次第に土製の高坏が盛行するようになっても、一貫して木製の高杯が、精製容器・容器として希少性の高い上位のものとして位置付けられているが（樋上 2012）、おそら

くその数量が土製の高坏に取って代わることは中期、後期を通じてなかったと思われる。

そこで、本稿での分析目的を明らかにするために、弥生土器の高坏を検討する意義を以下にまとめておきたい。都出氏は、弥生土器の一器種としての高坏の実態を分析するとともに、弥生土器の高坏を同時代の東夷の文化の中に位置付けしたことが注目される。『三国志 魏書』東夷伝倭人条の「食飲用籩豆手食」の記述によれば、「籩豆」と記された木製または竹製の「豆」を食器として使用していたとされている。そして、弥生時代後期から庄内式期の高坏と鉢を検討して、この時期の小型の個人用食器は土製の高坏と鉢であるという実態から、都出氏は「籩豆」の材質については、木、竹、土の違いを越えて「高坏」一般の意に解釈することによって、文献記載と考古資料の実態との齟齬を解消しようとした（都出 1984）。

高坏が古来の食器であることは、林巳奈夫氏が『漢代の文物』（林 1976）中の「籩豆」の項において、「漢代においては昔の食器と考えられてゐた。」としていることに関係がある。朝鮮半島北部のピョンヤン付近に紀元前 108 年に前漢が楽浪郡を設置して以降は特に、漢の周縁地域にある日本列島においても、その西半部を中心に、漢代にはすでに過去の道具であった高坏（豆）が中期以降に盛行することは、漢から見て「東夷」と認識された「倭」の弥生文化の周縁性を示す典型的な物質文化の様相であると思われる。したがって、弥生時代の高坏の動向を分析することを通じて、日本列島で展開した弥生文化の東アジア各地の文化の中における位置付けを示す一面を明らかにすることに資すると考える。

III. 本稿の分析の対象と目的

都出氏は 1982 年の研究（都出 1982）において、近畿（都出 1982 では「畿内」）の前期から後期の弥生土器を壺、甕、鉢、高坏に区別してその容量の変化を分析したが、さらに器種構成の変化も分析し、高坏と鉢については「第一—第四様式において比率の小さい鉢と高杯が第五様式において十数%の高率を示すことである。…（中略）…第五様式から布留式にかけての時期は小形の鉢、椀、高杯などの供膳用の小形の土器の比重が増大する」とした。その上で第五様式において土器が小型化することを、実測図から容量を算出することによって検討

した。その結果、高坏と鉢については、

高坏：第三・第四様式（本稿の中期中葉、後葉）で1ℓ未満の小型品と2～10ℓの大型品が発達し、第五様式（後期）では大型品が消滅して0.5ℓ前後の小型品と1～1.2ℓの中型品の二種類に分かれる。

鉢：0.3ℓ前後の小型と2～5ℓの大型の区別があり、第三・四様式（中期中葉、後葉）では20数ℓに達するものがある。第五様式（後期）の鉢は大きくても5ℓ前後で、大型品の中には口縁部を片口状に作るものがある。それは液体状の物質を注ぐ機能を想定できる。小型鉢は第五様式以前にも存在するが器種構成比率は低い。

としており、高坏には時期によって大型品、中型品、小型品、鉢は大型品と小型品があるとされ、後期になって畿内第五様式での土器の「小形化」を示した。

都出氏の容量の分析（都出1982）は、確かに土器の小形化を示すのに有効だが、高坏と鉢の想定される機能を改めて考えると、高坏は高い位置で盛り付けることがもともとの機能であり、口縁より上方にも高く盛り付けることが多かったとも考えられる。口縁以下に抑える必要がある液体を容れることは、あまりなかったのではない。むしろ奈良、平安時代の高坏の坏部が口縁に向かって大きく開き、口縁付近で屈折しないことも考えると、口径こそが高坏の内容物を盛り付ける量に深く関係すると考えられる。鉢は漫画などで描かれるような、その口縁よりも高く上方まで盛り付けることもあったであろうが、液体を容れる場合は口縁よりの方までしか容れない。大勢で飲食するものを、例えば座の真ん中にまとめて置く場合に使用する鉢のような器は、口径は大きい方が良いと思われるので、口径は鉢の用途を細分化する属性である。

都出氏や長友氏は、弥生時代後期において、高坏を食器と明快に論じたが、両氏が高坏とともに小型の鉢も食器としている。そこで、本稿では、ともに食器とされた高坏と鉢の関係について、両氏がおもに分析した後期に先立ち、日本列島西半部での高坏の使用が盛んになる中期（実際には中期中葉）から始めて後期までの両者の関係を、対象地域は北部九州地域、中部瀬戸内地域、近畿地域（大和）の三地域として、おもに口径と器高（高坏は坏部高）というサイズに注目して比較・検討する²⁾。

その理由は以下の通りである。高坏と鉢は、貯蔵具である壺や煮沸具である甕と異なって、坏部または体部が上方に大きく開くものが多く、その中に食物等を盛り付け、または取り分けるために製作された道具である。そして脚の付いた高坏は食物などを、より高い位置に盛り付けるもので、内容物が見えやすく、かつ供献する場合はその行為を視覚的に強調する効果がある。実際に北部九州地域の中期中葉には脚部高が30cmを遥かに超え、非常に器高が大きいものもある。一方、鉢は器台等の上に置けば、高坏と同じ効果があるが、そうでなければ比較的低い位置に置いて使用する。ただし、台付鉢と呼ばれるものもあり、床置きよりも意図的に高くしているものもあるが、高坏は台付鉢よりも内容物をより視覚的に強調できると考えられる。

また、広域における高坏の展開について総合的に検討した先行研究がある。それは前稿でも言及した赤塚次郎氏（赤塚2002）、田崎博之氏（田崎1995）、西谷彰氏（西谷2002）の研究である。赤塚氏は、弥生時代の後期以降に列島西半部で形態的な類似性が高まる高坏を後期前葉の「盤状高坏」、後期中葉以降を「有段高坏」として、広域的に捉えた（赤塚2002）。田崎氏は中期から後期の北部九州地域、瀬戸内地域、近畿地域の高坏を取り上げ、中期に北部九州地域では墓地や井戸からの出土が多かったのが、後期の下大隈式の段階で、集落遺跡からの出土頻度が上がることは、中期から集落遺跡で頻繁に出土していた瀬戸内地域や近畿地域と共通した高坏が、飲食具として受容されたとする（田崎1995）。西谷氏は中期後半に顕著であった高坏の地域の独自性が、中期末～後期初頭の移行期に変化し、大阪湾沿岸地域に系譜をもつ「定型高坏」は後期中葉以降に成立し、後期後葉以降に普及するとした（西谷2002）。日本列島西半部で土製の高坏が盛行し、後期になると北部九州地域から伊勢湾沿岸地域まで共通した形態の高坏が食器としての使用の広がりを指摘したのである。

註2で言及した溝口孝司氏の研究（溝口2022）を参考にすれば、供膳具である高坏や鉢には、①大勢で食事（共食）をする際に、取り分ける前に盛り付ける、②実際に個人が食事のために取り分ける、③食事だけではなく、食物の供献等の祭祀行為に使用する、といった用途のパターンが想定される。①は口径が比較的大きいも

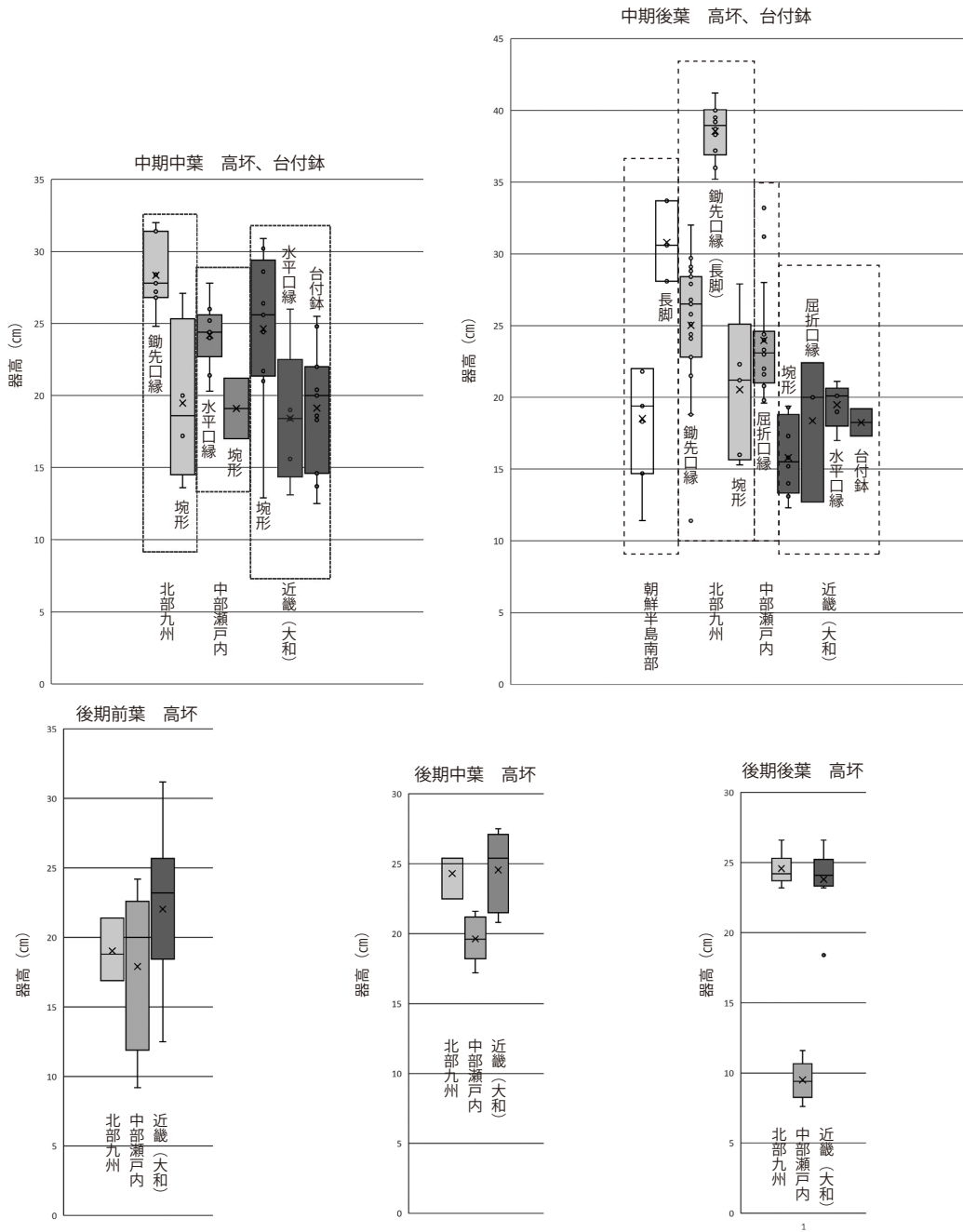
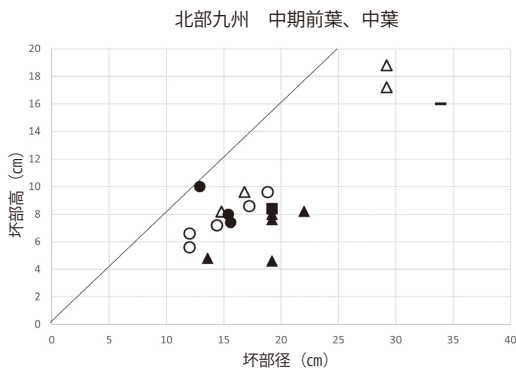


図1 北部九州、中部瀬戸内、近畿（大和）各地域の中期から後期の高坏、台付鉢（近畿）の器高

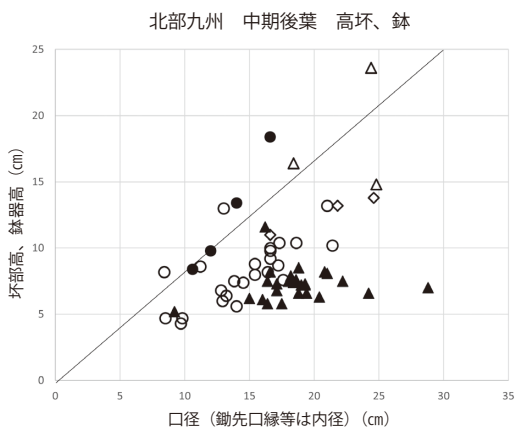
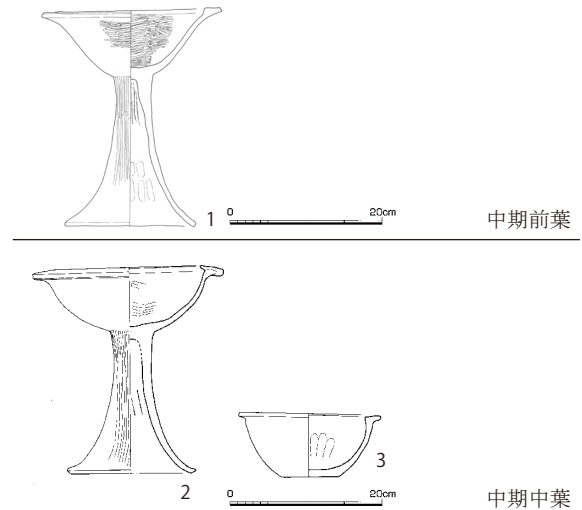
の、②は口径が比較的小さい小型のもの、③は脚部が付く高坏や装飾的な鉢などが該当すると想定できる³⁾。

そこでまず、高坏について、その特色である器高の検討（図1）を行った上で、図2～6において、高坏の坏部と鉢の口径と坏部高・器高という側面を通じて、列島西半部の三地域に高坏と鉢という二種類の供膳具の展開の共通性や特色について、田崎氏（1995）や西谷氏（2002）が高坏について明らかにした点以外に言える点

がないのかを考えたい。実際に分布図に示すのは、高坏が口径（坏部径）×坏部高、鉢が口径×器高で、ものを盛り付ける部分のサイズである。口径と坏部の高さ（深さ）、鉢の場合は器高の長さの比が1：1となるラインを各グラフに示して、そのサイズと、その土器の形が横長か縦長か、口径と高さがほぼ同じか、といったことを視覚的に示す。



- 高坏 (中期前葉)
- ▲ 高坏 (鋤先口縁)
- 高坏 (埴形)
- △ 鉢 (鋤先)
- 鉢 (素口縁)
- 鉢 (三角形凸)



- ▲ 高坏 (鋤先口縁)
- 高坏 (埴形)
- 鉢 (素口縁)
- △ 鉢 (鋤先口縁等)
- ◇ 鉢 (くの字口縁)

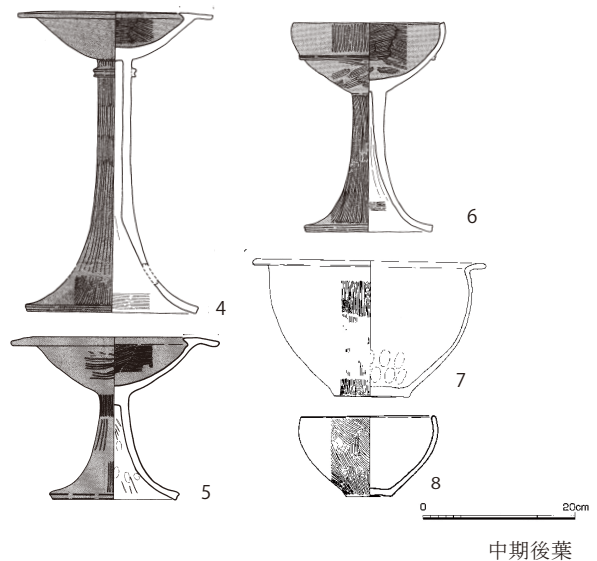


図2 北部九州地域の中期前葉～中期後葉の高坏の坏部高と口径、鉢の器高と口径（実測図は報告書より）

IV. 分析・検討

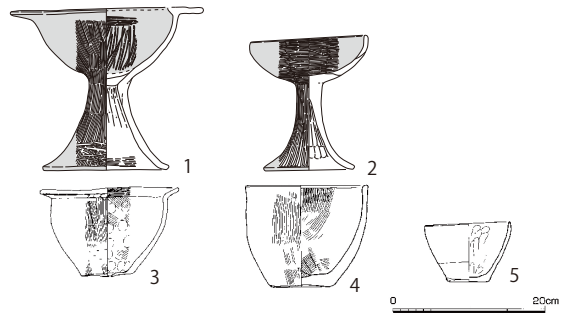
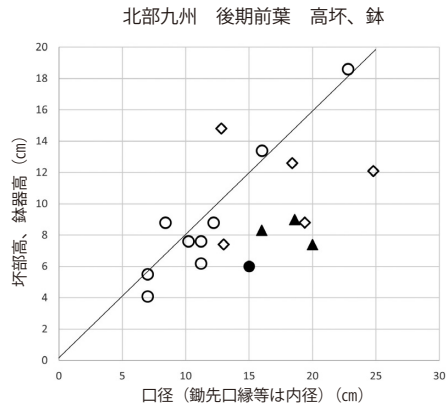
(1) 高坏の器高 (図1)

ともに供膳具である高坏と鉢の基本的な差異は、一貫して脚部（脚台）が付くかどうかである。確かに台付鉢はあるが、多くは台の付かない形態の鉢があって、それに台が付くものもあるといったものである。そこで、各地域、各時期の高坏と近畿地域の中期中葉と中期後葉で顕著な台付鉢について、その特徴である器高の数値を箱ひげ図（図1）で示し、その大まかな傾向を検討する。

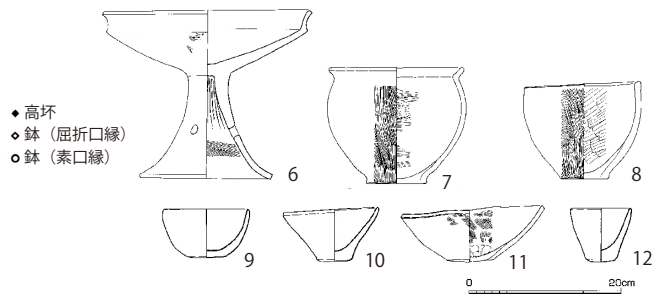
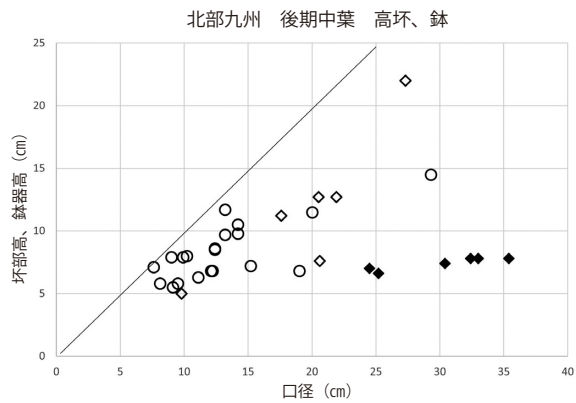
中期中葉には口縁部が外側に水平に伸びる形態のものや埴形のもの各地にあること、また口縁が高坏のように大きく開く台付鉢が近畿地域（大和）にはあって、器高が近畿の水平口縁の高坏とそれほど変わらないことが注

目される。また中期後葉に、北部九州地域において鋤先口縁のもので、器高が35cmを超える極端に長脚のものがあることが特徴的だが、参考として示した朝鮮半島南部にも彼地の他の一般的なものと比べて長脚のもの（星田礼山里、密陽校洞）があり、注目される。

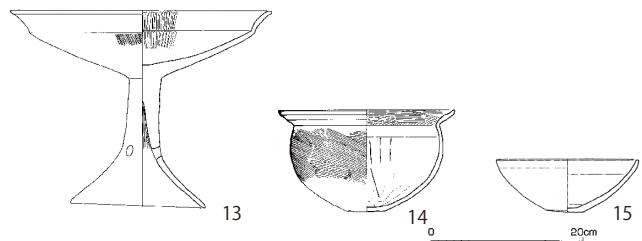
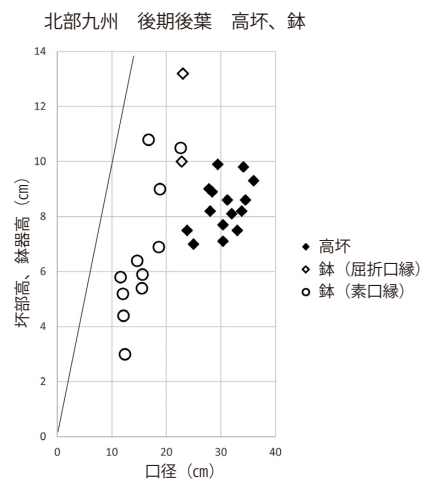
後期前葉には北部九州地域では高坏が激減して、完形品のデータが少ないが、他の地域と比べて平均値も20cmを下回って一番器高が低くなるが、後期中葉には「定型高坏」（西谷2002）が北部九州地域でも出現すると、近畿地域（大和）とともに平均値が25cm近くで並ぶ。しかし中部瀬戸内地域では平均値が20cmほどと他の2地域より5cmほど小さくなる（図4の下）。これは続く後期後葉にさらに顕在化し（図5の上）、北部九州地域と近畿地域（大和）では器高は25cm前後で平均



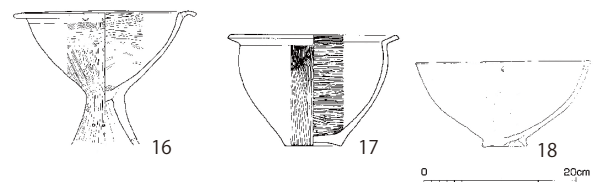
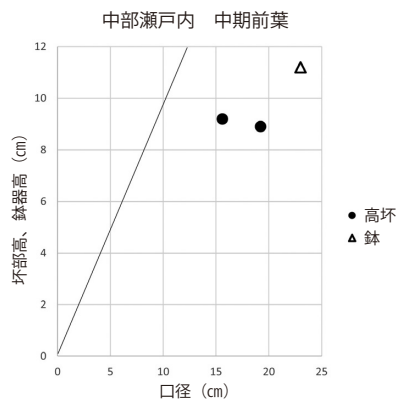
北部九州 後期前葉



北部九州 後期中葉

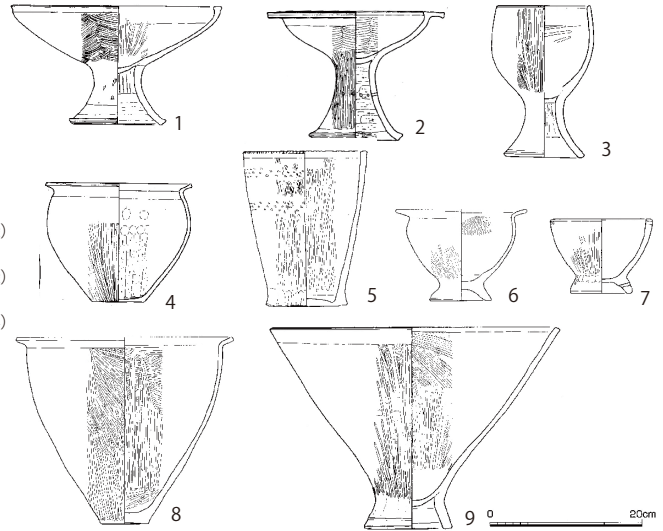
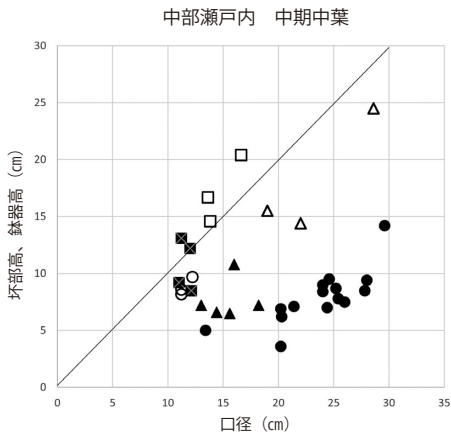


北部九州 後期後葉

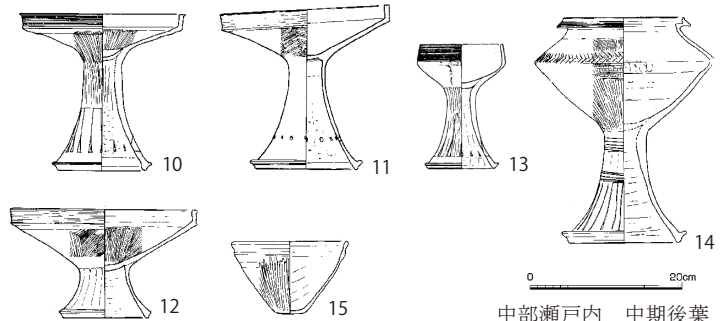
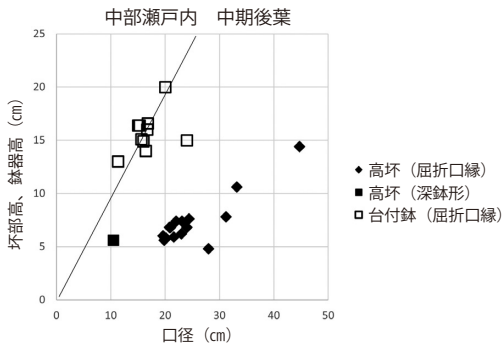


中部瀬戸内 中期前葉

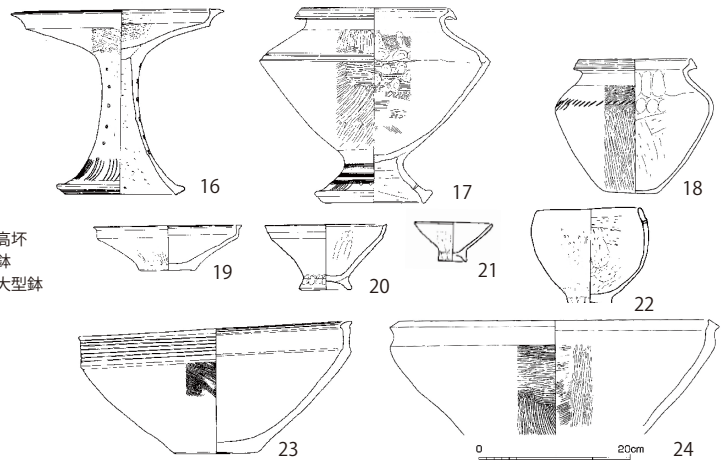
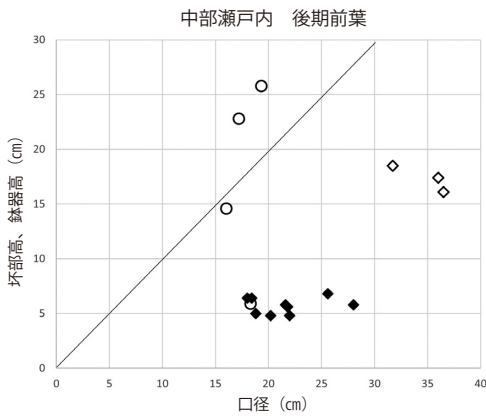
図3 北部九州地域の後期各時期、中部瀬戸内地域の中期前葉の高坏の坏部高と口径、鉢の器高と口径（実測図は報告書より）



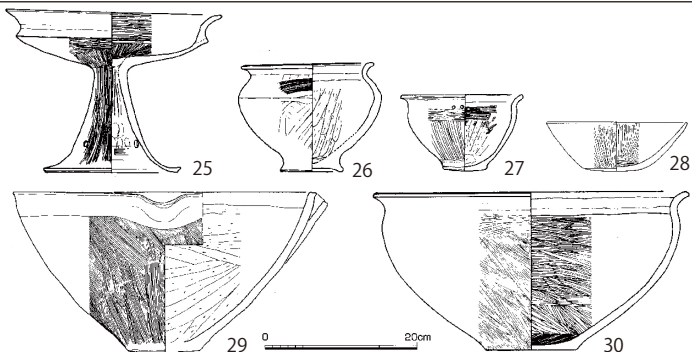
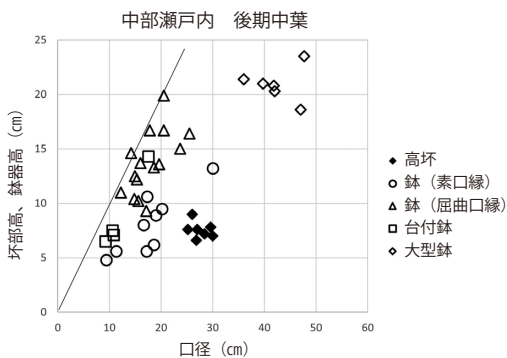
中部瀬戸内 中期中葉



中部瀬戸内 中期後葉

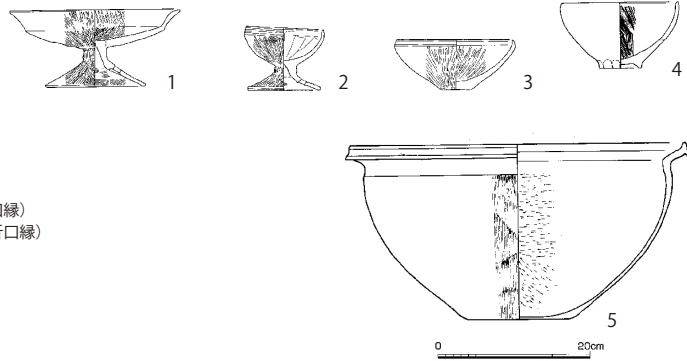
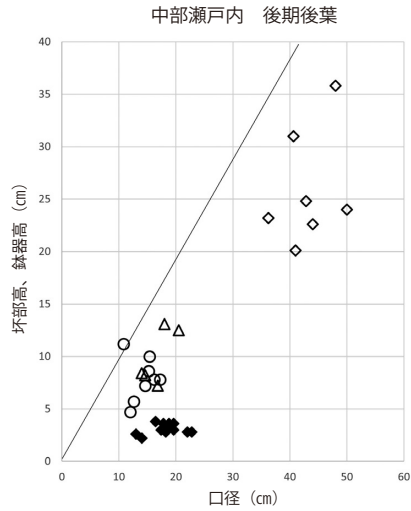


中部瀬戸内 後期前葉



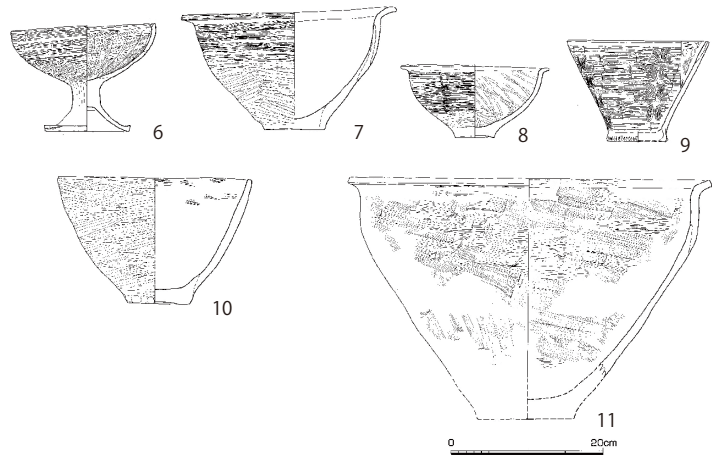
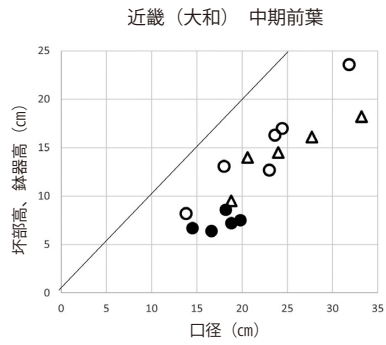
中部瀬戸内 後期中葉

図4 中部瀬戸内地域の中期後葉、後期各時期の高坏の坏部高と口径、鉢の器高と口径 (実測図は報告書より)



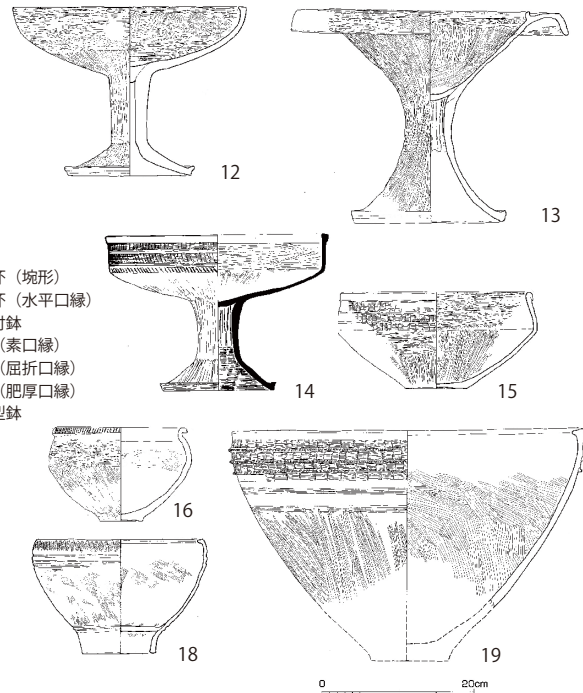
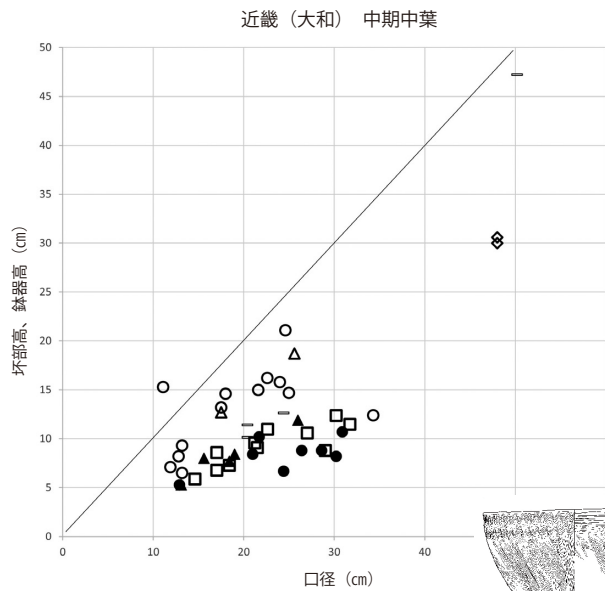
- ◆ 高坏
- 鉢（素口縁）
- △ 鉢（屈折口縁）
- ◇ 大型鉢

中部瀬戸内 後期後葉



- 高坏
- 鉢（素口縁）
- △ 鉢（屈曲口縁）

近畿（大和） 中期前葉

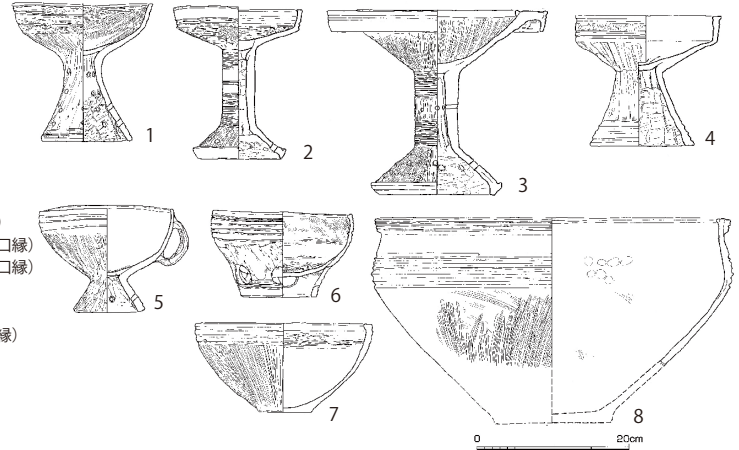
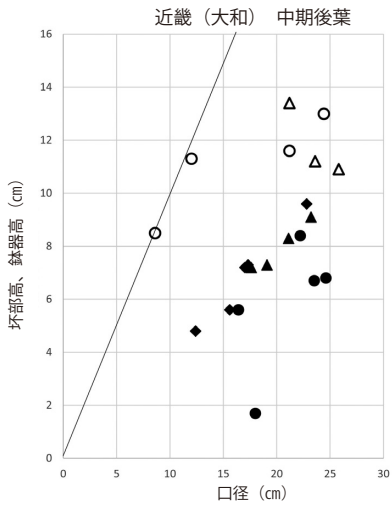


- 高坏（壙形）
- ▲ 高坏（水平口縁）
- 台付鉢
- 鉢（素口縁）
- △ 鉢（屈折口縁）
- ▽ 鉢（肥厚口縁）
- ◇ 大型鉢

近畿（大和） 中期中葉

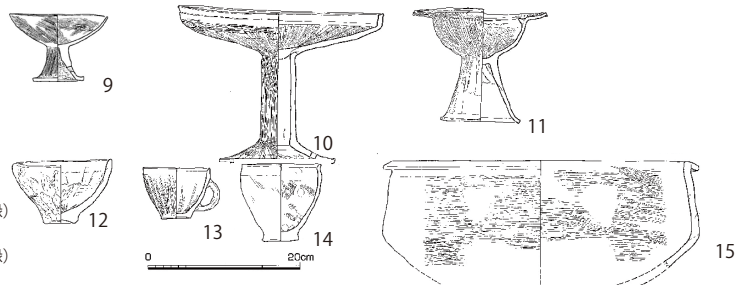
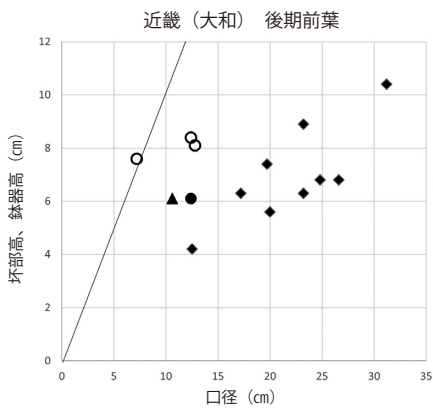
図5 中部瀬戸内地域の後期後葉、近畿地域（大和）中期前葉、中葉の高坏の坏部高と口径、鉢の器高と口径

（実測図は報告書より）



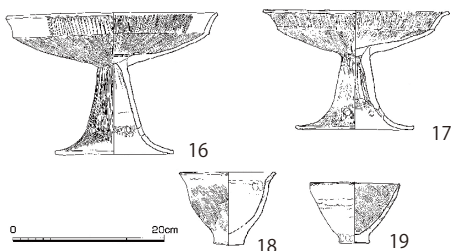
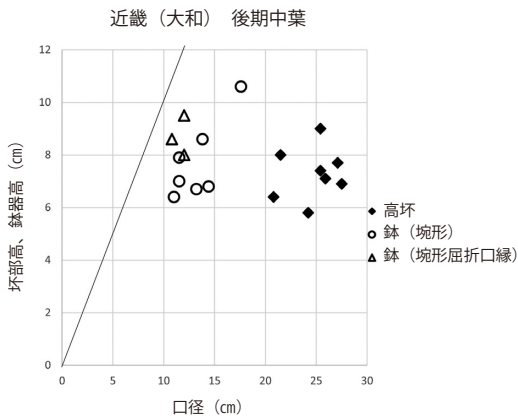
- 高坏（椀形）
- ▲ 高坏（水平口縁）
- 高坏（屈折口縁）
- 台付鉢
- 鉢（椀形）
- ▲ 鉢（屈折口縁）

近畿（大和） 中期後葉

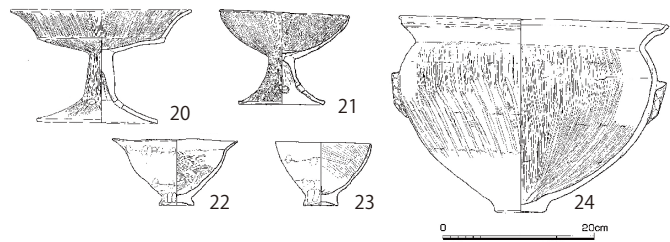
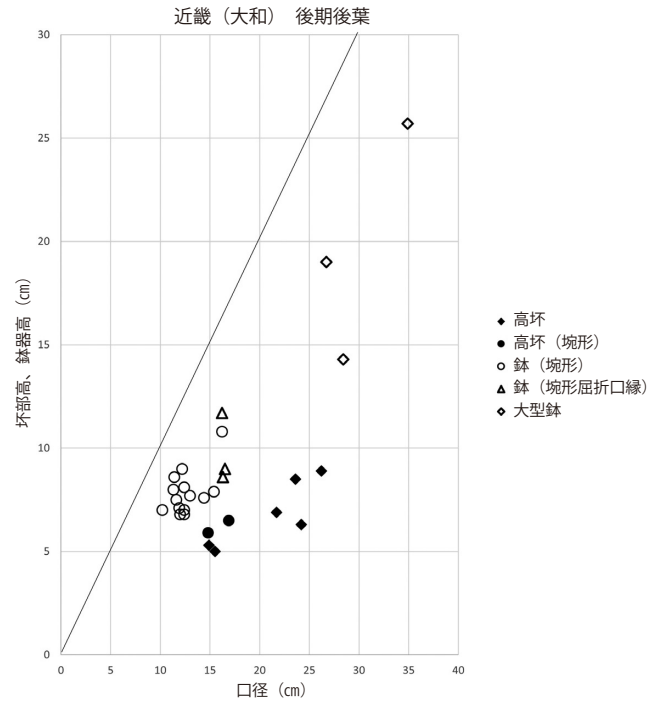


- ◆ 高坏（屈折口縁）
- 高坏（椀形）
- ▲ 高坏（水平口縁）
- 鉢（椀形）

近畿（大和） 後期前葉



近畿（大和） 後期中葉



近畿（大和） 後期後葉

図6 近畿地域（大和）の中期後葉、後期各時期の高坏の坏高と口径、鉢の器高と口径（実測図は報告書より）

値も 25cm をやや下回る程度だが、中部瀬戸内地域では低脚化が進み、器高が後期中葉よりさらに低くなって、10cm 前後となる。

一方で、北部九州地域と近畿地域（大和）の後期中葉と後期後葉では、器高の平均値が 25cm をやや下回るが、そのサイズは実は中期後葉において、北部九州地域の極端に長脚化した高坏や、中部瀬戸内地域の少数の高坏を除くと、15cm ～ 20cm 前後の器高のものが中期後葉や後期前葉で衰退した後に一般化したサイズである。そして、中期中葉の中部瀬戸内地域と近畿地域（大和）の壙形高坏や中期後葉の鋤先口縁の高坏の器高の平均値に近い。中期中葉以降の、土製の高坏が初めて盛行し始めた頃に、北部九州地域でもっとも一般的な鋤先口縁の高坏や、中部瀬戸内地域と近畿地域（大和）で一般的な壙形高坏の器高が近畿地域（大和）では平均値が 25cm 前後であったことを考えると、高く盛り付ける器種としての高坏の本来の器高に、後期中葉と後期後葉の時点で落ち着いていたとも考えられる。

既往の研究で、後期には高坏の器種構成比は高まるとされているが（都出 1982、田崎 1995、西谷 2002）、身体に対する高坏の器高の地域間の差異の存在は、飲食時の配膳形態や、祭祀時の様々な供献品の中における高坏の役割にも差異が生じていた可能性を示すと考えられる。

（2）高坏の坏部と鉢のサイズ比較（図 2～6）

先に述べたように、実際に食物を盛り付け、容れる部分の口縁部の大きさや深さを検討する。

a. 北部九州地域（図 2、3）

中期中葉から後期中葉まで、高坏の坏部（本稿では以後、単に坏部と表記）が鉢の浅い一群と比べて同程度の高さ（深さ）である 10cm 以下が大部分であり、さらに口径については、中期中葉の大型の鉢や後期前葉に高坏が激減、衰退して矮小化した時期を除き、鉢と同程度かそれより大きい。後期後葉には図 3 - 15 のように小形の浅い鉢が増えるため、坏部の方が口径、高さ（深さ）ともに大きい（深い）様相となる。

b. 中部瀬戸内地域（図 3～5）

中期前葉は良好な事例を採取できていないので参考として挙げておくが（図 3 の下）、中期中葉から後期前葉にかけて、坏部が大部分の鉢よりも浅い傾向が明確であ

る。図 4 - 19 の鉢のように坏部と同様の形態をもつものもまれにある。口径は後期前葉になると大型鉢の方が大きくなる。後期中葉になると、台付ではない鉢の中で、坏部の 5～10cm の中に収まるのと同程度の高さ（深さ）であり、かつ口径の小さいものが増える。後期後葉になると坏部は高さ（深さ）が 5cm 以下となり、口径も 20cm 以下に縮小し極端に小型化が進むが、鉢の傾向は前の時期から大きく変わらない。

c. 近畿地域（大和）（図 5、6）

坏部高（深さ）は大部分が一貫して 5cm ～ 10cm に収まる。中期を通じて、坏部は鉢よりも低い（浅い）状況であり、口径は、10cm 以上であり大型鉢以外の鉢と類似した大きさである。ただし、中期前葉は主流とされる木製の高杯との関係か、口径は 20cm 程度までに収まっている。また口縁が短く直立して端部が外面で肥厚する鉢には、大型品と中型品があるが、中型品に台付のものが中期中葉に多くみられる。この台付鉢の鉢部のサイズは、先の器高の検討では水平口縁高坏との類似を確認したが、坏部との比較においても、水平口縁のみならず壙形のものと同じ分布域にある。後期前葉には、坏部の口径が鉢より大きくなる傾向がみられ、後期中葉、後葉はグラフの同じ坏部高、器高の付近で、左側に鉢、右側に高坏部が分布する状況となる。ただし、大型鉢はこれらとは別により口径が大きく、高い（深い）範囲に分布する。

d. 三地域の比較

大型鉢を除くと、中期には坏部の高さ（深さ）は類似した口径の鉢より低い（浅い）か、同じ程度である傾向であったが、後期になると次第に鉢よりも坏部の口径が大きくなり、後期中葉には三地域でともにそのことが明確になる。だが、後期後葉には中部瀬戸内地域において、鉢よりも坏部が低く（浅く）なり、口径は鉢と同程度という、他の二地域とは別の傾向を示す。高坏の器高の検討では、後期中葉から他の二地域と異なり、低くなる傾向が表れていたが、後期後葉では低脚化と、坏部の口径と坏部高の縮小化の二つの現象がともに進行したことが、他の二地域と比較することによって、より地域的な特徴であることがより明確に分かる。

e. 検討

供膳具である高坏と鉢は、お互いに機能を補完し合っ

ていて、使用時に機能が重複することもあったであろう。中期において坏部と鉢の口径が、大型の鉢は別として、類似したサイズで分布しつつ坏部の高さ（深さ）が浅いことは、低く置いて、食物など内容物を高く盛り上げる場合も、高坏と同様に鉢にもあったことを示唆する。近畿地域（大和）の台付鉢は、口径と鉢部の高さ（深さ）の分布域が、水平口縁高坏などと重複していることから、高坏と台付鉢として台上に作り付けられた鉢との機能の境界の曖昧さを示していると思われる。

しかし、時期がくだって後期中葉になると、坏部と鉢の口径が分離してゆくことは、脚の付く高坏と、平置きする鉢のそれぞれの用途の違いが口径サイズでも明確化していったことを示している。だが、中部瀬戸内地域では高坏の低脚化と口径の縮小化が進み、後期後葉に顕著となる。坏部のサイズは高さ（深さ）は鉢より低く、口径は同じくらいになる。内面の見込み部分が広い高坏は口径が鉢と同じ程度であれば、盛り付けられる量は鉢より多いと思われるが、視覚的にはその効果は弱くなることは否めない。しかし、黒宮大塚や楯築墳丘墓の主体部上から多量のこの低脚で小型化した高坏が出土していることから、依然として墓前祭祀にも用いられた。しかし、後期になって、西谷氏の「定型高坏」が北部九州でも食器として受容されていたとしても、セットとなる鉢との関係性は、北部九州、近畿（大和）とその間の中部瀬戸内では異なった展開を見て取ることができる。

V. まとめ

本稿では、高坏の坏部と鉢のサイズを分析属性として、両者の通時の変化とその関係、地域的な共通性と差異の様相を検討した。中期中葉以降に日本列島西半部を中心に次第に盛行していった高坏について、後期には広域で坏部形態が類似してくるものの、同じ供膳具として想定される鉢との関係性は、坏部と鉢のサイズの展開を比較することによって、地域ごとの特色があることを指摘した。

前期には木製の高杯が土製の高坏よりも主であったことは、本稿の冒頭でも述べたところであるが、土製の高坏や鉢と木製品の関係もこれまでも注目され、論じられてきた（長友 2009、中川 2013）。長友は土器と木器の関係性について、3つのパターンがあるとし、第1が「高

杯のように異素材同形で同用途の場合」、第2が「異素材異形で同（近）用途の場合」で「土製無頸壺と合子の例、土製および木製高杯と木製の二脚盤の例」、第3が「異素材異形異用途の場合で」、「煮沸具として火にかけられる土製甕や大型貯蔵具、木製の食事具がそれにあたり、素材の性質が活かされている」とした。高坏や鉢は第1、2のパターンであり、土製、木製のサイズを比較すると器高、坏（杯）部高、口径といった今回の分析で用いた器のサイズを規定する要素の一面が明らかになると思われる。資料的な制約はあるが、今後取り組みたい。樋上は土器と木器の関係について先述したように、黒漆や赤彩を施し、丁寧に加工された美しい木製の容器類を精製容器類として、土器よりも上位者の所有物に位置付けしている（樋上 2012）。この観点も重要と考える。

今後は土製の高坏や鉢と、木製の高杯や鉢との関わりについて分析を進めるとともに、大陸における土器や漆器、木器がある「豆」の異なる材質間との関係との比較検討⁴⁾も、他器種も併せて検討する形で取り組みたい。

註

- 1) 朝鮮半島南部における粘土帯土器段階の豆形土器の展開についての理解は、前稿同様に沈秀娟の研究（沈 2011）に拠っている。
- 2) 溝口孝司氏（溝口 2022）は、中部瀬戸内から近畿（溝口氏は岡山県、兵庫県、大阪府北部、奈良県、大阪府南部と地域設定）における中期の「高坏形土器、大型鉢形土器、広口壺形土器、甕形土器」について、おもに器形や紋様の地域的な分布様相を検討して、本稿で取り上げる高坏と、鉢のうち大形鉢を、ともに「饗膳具」であって、共食する人がそれを囲み、日常的に顔を合わせる人、時々顔を合わせる、それまで知らない人に食事を供し共食する場合など、対面的に相互交渉のする際（さらに大型鉢は葬送儀礼の場での使用）に使用された器種とした。溝口氏の分析は、高坏や大型鉢の広域の形態的な斉一性が生じていた背景を説明していて、後述する田崎氏（田崎 1995）や西谷氏（西谷 2002）の研究が示した現象について、その背景の一面を明らかにしたものと考え。本稿では、これらの既往研究の成果を念頭において、供膳具である高坏と鉢の関係を、おもにサイズに注目して通時的に比較しながら、分析対象とした各地域の特色と地

域間の関係を検討することを志向する。なお、北部九州の鋤先口縁や中部瀬戸内、近畿（大和）の水平口縁の高坏の口径は、鉢との比較という観点から、内側で計測した数値（内径）を使用する。

- 3) 大型鉢は、飲食行為だけでなく、食物の貯蔵や調理などの機能も想定できる。他のサイズの鉢も調理に用いられた場合もある可能性がある。
- 4) 長友はこの点についてもすでに、中国、朝鮮半島の漆器、白木木器と土器の関係と、日本列島における木製品と土器の関係について比較検討をおこなっている（長友2016）。

挿図掲載土器出土遺跡

- 図2 1：増田、2・3：大板井、4～6・9：東小田峯、7・8：比恵
- 図3 1～3・7・8：比恵、4・5：那珂、6・13・小葎（大原B）、9～12：日永、14・15：雀居、16・18：南方、17：百間川兼基
- 図4 1・3・9・11・12・14：菰池、2・4・10：百間川今谷、5：南溝手、6～8：南方、13・15：上東、16・20・22：百間川兼基、17～19・23・24：高塚、21・25～27・29・30：百間川原尾島、28：鹿田
- 図5 1～5：百間川今谷、6～13・15・17～19：唐古・鍵、14：坪井・大福、16：脇田
- 図6 1・3～7：唐古・鍵、2：八尾九原、8～24：唐古・鍵

参考・引用文献

- 赤塚次郎 2002「土器様式の偏差と古墳文化」『考古資料大鑑1』小学館
- 井上秀雄ほか訳注 1974『東アジア民族史1 正史東夷伝』東洋文庫264. 平凡社.
- 川上洋一 2021「弥生時代の高坏」岩永省三先生退職記念事業会（編）『継続する志』上 中国書店
- 小林行雄・末永雅雄ほか 1943『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究报告第16冊 桑名文星堂
- 佐原眞 1976『日本の美術125 弥生土器』至文堂
- 佐原眞 1988「弥生土器の用途と製作」大塚初重・戸沢充則・佐原眞（編）『日本考古学を学ぶ（2）〔新版〕』有斐閣選書841 有斐閣

- 沈秀娟 2011「嶺南地域出土豆型土器の性格」『韓国考古学報』79 韓国考古学会（韓国語）
- 田崎博之 1995「瀬戸内における弥生時代社会と交流」松原弘宣（編）『古代王権と交流6 瀬戸内海地域における交流の展開』名著出版
- 都出比呂志 1982「畿内第五様式における土器の変革」『考古学論考—小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社（〔都出比呂志 1989「土器の器種構成と消費単位」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店として補訂，収録）
- 都出比呂志 1984「畿内の社会・生活—籩豆手食の俗—」『季刊考古学』6 雄山閣（〔都出比呂志 1989「個人別食器の成立」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店として補訂，収録）
- 坪井清足 1959「弥生式土器」水野清一・小林行雄（編）『図解考古学辞典』東京創元社
- 中川寧 2013「土製と木製の容器」『弥生土器研究の可能性を探る』弥生土器研究フォーラム
- 長友朋子 2005「弥生時代から古墳時代への食事様式の変化とその歴史的意義」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学研究室
- 長友朋子 2009「弥生時代の食器組成の変化と食器生産」『木・ひと・文化：出土木器研究会論集』出土木器研究会
- 長友朋子 2016「木製品は何を語るか」『考古学研究60の論点』考古学研究会
- 西谷彰 2002「弥生時代における定型高坏の成立過程」『人類史研究』13 人類史研究会
- パク・ヤンジン 2022「東北アジア豆形土器の出現と発展—中国東北地方を中心に—」『湖西考古学』52 湖西考古学会（韓国語）
- 林巴奈夫 1976「五 什器（三）食器（5）豆」『漢代の文物』京都大学人文科学研究所
- 樋上昇 2012「木製品の流通と社会階層」伊東隆夫・山田昌久（編）『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社
- 溝口孝司 2022「考古資料からコミュニケーション・システムの存在・作動を分析する—きれいな土器とそうでもない土器—」『社会考古学講義—コミュニケーションを分析最小基本単位とする考古学の再編—』同成社

挿図引用報告書および文献、本文で言及した遺跡報告書

《北部九州地域》

- 福岡市教育委員会 1986『比恵遺跡第9・10次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第145集
- 福岡県教育委員会 1988『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告15』下巻
- 福岡市教育委員会 1992『那珂遺跡4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第290集
- 佐賀市教育委員会 1993『増田遺跡群I』佐賀市文化財調査報告書第43集
- 福岡県教育委員会 1994『一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 日永遺跡II』第7集
- 福岡市教育委員会 1995『雀居遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第406集
- 今津大原小葎遺跡調査会・福岡市教育委員会 1997『小葎遺跡一福岡市西区大原B遺跡第1次発掘調査報告一』福岡市埋蔵文化財調査報告書第541集
- 筑前町教育委員会 2020『東小田峯遺跡II』筑前町文化財調査報告書第25集

《中部瀬戸内地域》

- 間壁忠彦・間壁葎子・藤田憲司 1977「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号 倉敷考古館
- 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 1982『百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51
- 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 1984『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
- 近藤義郎 1987『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会
- 岡山県教育委員会 1988『本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査II』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告71

- 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988『鹿田遺跡I』岡山大学構内遺蹟発掘調査報告第3冊
- 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 1994『百間川原尾島遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88
- 岡山県教育委員会 1996『南溝手遺跡2』岡山県埋蔵文化財調査報告107
- 日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会 2000『高塚遺跡 三手遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書150
- 岡山県教育委員会 2001『上東遺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告158
- 国土交通省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 2009『百間川今谷遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告217
- 岡山市教育委員会 2016『南方遺跡一岡山済生会総合病院新病院建設に伴う発掘調査一（第2分冊）』
- 宇垣匡雅 2021『楯築墳丘墓』岡山大学文明動態学研究所・岡山大学考古学研究室

《近畿地域（大和）》

- 奈良県立橿原考古学研究所 2000『坪井・大福遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第75冊
- 大和弥生文化の会 2003『奈良県の弥生土器集成』大和の弥生遺跡 基礎資料II（奈良県立橿原考古学研究所 2002『奈良県の弥生土器集成』橿原考古学研究所研究成果第6冊）
- 《朝鮮半島》
- 慶尚北道文化財研究院 2005『星田 栢田 禮山里 土地區劃整理事業地區内 文化遺蹟發掘調査報告書』學術調査報告48
- 密陽大學校博物館・密陽市 2004『密陽校洞遺蹟』密陽大學校博物館學術調査報告7

謝辞

本稿を提出した後に、掲載図データの調整等について、垣内喜久子氏には非常にお手を煩わせた。心より感謝をいたします。